

村山定男先生を偲ぶ

西城恵一（国立科学博物館）

本会会員で国立科学博物館名誉館員の村山定男先生が、さる8月13日午後0時3分前立腺がんによる多臓器不全のため逝去されました。89歳でした。日本天文学会では評議員を1968年から1984年まで、支部理事を1967年から1989年まで（1972年を除く）という長期にわたって務められました。先生は日本の隕石の調査研究がいわば本業でしたが、惑星、特に火星面の継続観測で知られるほか、特筆すべきことは天文学の普及・教育にご尽力されたことでした。多くのテレビ・ラジオの出演、天文学に関する多数の講演や多くの天文学の解説書を通して、一般公衆に天文学の魅力を語ってあきることがありませんでした。

筆者は1981年から国立科学博物館に勤務し天文を担当しています。先生の部下としてご退官まで（そしてそれ以後も）そのご活躍を身近に見せていただきました。

ご経歴

村山先生は1924(大正13)年4月9日 東京市本郷区（現東京都文京区本郷）に誕生されました。母加久の父は、日本住血吸虫症の中間宿主ミヤイリ貝を発見した宮入慶之助。父村山達三は東京都立駒込病院院長などを務めた、著名な伝染病医です。誕生日については「悪い数字、13, 4, 9が並ぶけど、そう悪い人生ではなかったよ」とよくおっしゃっていました。誠之小学校では小尾信彌先生と同級生です。

先生は幼少のころからの天文少年であり、1929年には初めて火星のスケッチを描いたとのことでした。それ以後、火星をはじめとする惑星面をスケッチにより精力的に観測されています。旧制武蔵高校から東京帝国大学理学部化学科に進まれましたが、父達三氏は星ばかり見ている村山氏を叱ったと言われます。「父親は医者にした



写真1 村山先生の米寿を祝う会席上（2011年10月1日）中央車いすが村山先生。

かったが、血を見ると卒倒するので…」と村山先生。祖父慶之助は「定男は理学部がいいよ」と言われたそうです。天文学科に進みたい気持ちがあったと村山先生はおっしゃったが、父達三氏は当時の東京天文台長関口鯉吉氏と友人であり、関口氏から「天文は食えないよ」とのご託宣があったということで、化学科に落ち着いたといえます。化学科では分析化学の木村健二郎先生のもとで学ばれたが、天文に少しでも関係がある「隕石」の研究を志すことになりました。

1946年から東京科学博物館（現 国立科学博物館）に勤務され、隕石とともに天文を担当されました。そして、それまで科博に集まっていた隕石をその由来からきちんと整理されるとともに、日本の隕石の本格的な調査研究を始められました。「“Meteoritics” 1巻（1955）から論文を書いたよ」とおっしゃるとおり、日本の宇宙化学の先駆者の一人になりました。その後は国立科学博物館を拠点に研究と、教育普及にご活躍されました。

国立科学博物館（以下、科博）では、後に初代の理工学研究部長、初代理化学研究部長、そして再び（機構改革により）理工学研究部長と、研究部長職を17年もの長きにわたって務められまし

た。1989(平成元)年科博を定年退官、名誉館員とされました。その後、天文博物館五島プラネタリウム館長を、2001年3月11日の閉館まで務められました。そのほかでは、東亜天文学会会長、日食情報センター会長などアマチュア天文界の要職を務められました。2003年末脳梗塞を発症され、それ以後は車いす生活となりましたが、日食観測ツアーへご参加されるなど、天文活動は衰えることがありませんでした。

先生は1994年勲三等瑞宝章を受章されており、ご逝去の後、正五位に叙されました。

ご研究

ご経歴のご紹介では、やや形式的に過ぎました。先生はもう少しだけた方でしたので、ここからやや柔らかく目にお話したいと思います。先に述べたように、日本の隕石の調査研究が先生のご本業です。専門誌に日本の隕石についての調査研究の結果を発表されましたが、特にご在任の始めのうちは隕石の新発見がとても少ないときでした。また、日本各地から隕石ではないかという鑑定依頼がありましたが、「僕は千三つ屋でねえ。千に三つ、いや万に八つしか、本当の隕石はないよ」とのとおおり、数千個の隕石候補のうち、真の隕石は岡部、芝山の2個のみでした。1980年ごろから隕石落下が見られるようになり、先生がそれまでに築かれたアマチュア天文家のネットワークが働くようになってきます。結局は見つからなかったのですが、瀬戸内火球(1975)、小国火球(1977)では、瀬戸内海や山形県の山地を多くの方々の協力で隕石を捜索することができました。青森、富谷、国分寺などの隕石では、各地から隕石落下の報が入ると、執務中の部屋からすぐ飛び出して、現地に向かわれました。隕石の放射分析はその新鮮さが命なのです。預かった隕石を持ち帰ると、同僚の島正子さんたちとの研究に組み込まれたのです。

もう一つの本業?は、火星面の連続観測です。

「僕は天文はアマチュアだよ」とおっしゃっていましたが、天文少年のころから継続して火星のスケッチ観測を行われており、1929年から最後は2003年の大接近まで火星の接近時には必ず観測を行われていました。

科博に勤務されてからは、日本光学製の20 cm屈折鏡(写真2)が自由に使えることもあり、さらに熱が入ることになります。全国各地のアマチュア天文家や京大の宮本正太郎先生たちと深い交流をお持ちになりました(写真3)。しかし、科博の管理体制の整備?に伴い1965年にはご自宅に30 cm反射鏡を入れたドームを作られ、村山天文台として観測を続けられます。戦後間もない頃、学者館長だった中井猛之進氏や岡田要氏らは、20 cm鏡について「村山君のおもちゃやなあ」と評しておられたとか。

1970年には長年にわたる火星観測に対して、フランス天文学会アンリ・レイメダルを受章されます。

「僕は化学会に行くとき、あいつは天文屋だと思われているし、天文学会に行くとき、化学屋と思われる」

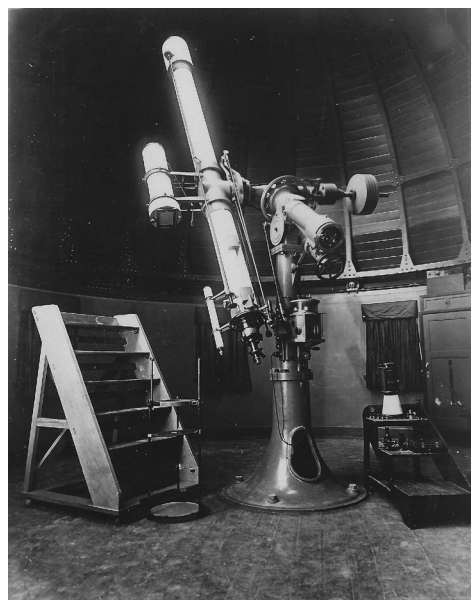


写真2 20 cm屈折赤道儀



写真3 20 cm鏡による火星観測。左が村山先生、右の観測者は海老沢嗣郎氏

れて、コウモリみたいだったけど、それぞれ偉い先生たちとお付き合いできて、面白かったねえ」と述懐されていました。

科博での天文普及活動

科博での定例的な天文普及活動は二つあります。一つは夜間天体観望会で、1931(昭和6)年科博が上野に開館して以来続けられている行事です。毎週土曜日晴天時には上記20 cm屈折鏡を用いて天体を来館者に観望させるものです。科博・天文はいわばこの担当者としての職務から必要とされるものでした。初代の鈴木敬信氏以来、戦前は藤田良雄先生や古畑正秋先生たちが嘱託として天文部主任を務められました。村山先生もちろんこの業務を定年退官まで務められました。「部長はそんなことをしなくてもいいよ」と官僚出身の館長には言われたそうですが、研究部長職に就かれてからも熱心に続けられました。この業務の辛いところは、必ず土曜夕方には科博にいないといけない、ことです。時には、やむをえない理

由で、同僚の小山ヒサ子先生、後には筆者に任せて留守にされることもありましたが、ほぼ毎土曜日は上野にいらっしゃいました。

もう一つは天文学普及講演会です。毎月第三土曜日午後「天文ニュース解説」と主に外部の講師による講演で行われる講演会です。戦前も不定期な天文講演会はありましたが、定期的な講演会にされたのは村山先生です。1946(昭和21)年4月から始まり、今年10月で800回を数えることになりました。実は、この会は初めは日本天文学会との共催で始まりました。第1回の講師は先の関口鯉吉氏で、聴衆は科博講堂を埋め尽くす400名以上が参会したそうです。当時の東京天文台長関口先生は、戦前は「通俗雑誌の執筆や通俗講演はまかりならぬ」と職員に通達されていたそうですが、敗戦で「僕は心を入れ替えたよ」と科学普及の大切さを述べられたそうです。日本天文学会との共催はいつまで続いたのか、定かではありません。しかし、退官されるまでのほとんどの回で村山先生は「天文ニュース解説」を続けられました。会場の都合により、特に初めのうちは科博の設備が狭小なため、特別展等で講堂が使えないときにはやむなく中止する場合も多かったので、年数と回数が一致しません。この講演会でも主たる講演者をお願いすることが、やはりたいへんな仕事でした。「講演料」と胸を張って言えるほどの謝礼が出せなかったからです（これは現在も同じですが）。

そのほかには、1949年夏から10年ほど毎年春夏秋冬3回ずつ星座講習会が行われました。講堂で星の動きや星図の見方を説明し、屋上で長い棒を使い星座を指して指導しました。「終戦直後は上野公園で黄道光が見られた」と、村山先生。現在のの上野公園の極限等級は2等星で、星座の形もつかめません。また、日食・月食、火星の大接近のような特別観望会や特別講演会なども行われました。特に1956年の火星の大接近は大盛況で、夜半過ぎまで行われ、10秒足らず望遠鏡をのぞ

くため、5時間以上も待った人もでたそうです。これは、結局3夜行われることになりました。また、木辺成磨氏を講師に何度も鏡面研磨講習会を開かれたりもしました。

さて、もう一つ科博で特記しなくてはならないのが、質問電話です。平均毎日十数件、特別な天文現象が近いときには数十件の質問電話がかかってきました。これに答えることも業務の一つです。多いときは2台の（後には筆者も独立の内線電話がありました）電話が一日中鳴りっぱなしで、質問にお答えすることがありました。こういうとき、村山先生も質問に答えられるわけです。なかには「この電話さえ取らなければ、気分のいい一日を過ごせたのに」というような電話もあります。「部長さんが電話の質問に答えられるのですか？」とたまたまいらっしゃったお客さんが驚くこともありました。

科博としての常設の天文展示のため立案実施することはもちろんですが、火星展や隕石展、望遠鏡展やカメラ・写真展、「月の石」展などの特別展の企画・実施も手がけられました。

展示では、望遠鏡による太陽H α 像の展示、恒星三次元分布、隕石落下ジオラマなど、その時点での先進的・先導的な展示を実施されました。また、60 cmパラボラ鏡を科博に設置し、東京天文台太陽電波部と協力して太陽電波の連続観測にも取り組まれました。

科博外での天文普及活動

科博での活動と連携していることも多いのですが、科博在職中やその後の科博外での先生の主な活動について触れます。まず、五島プラネタリウム開設の中心として活躍されました。1953年戦後の東京に再びプラネタリウムを、という機運のなか、当時の科博館長の岡田 要氏や学芸部長の朝比奈貞一氏（村山先生の上司）、学術会議会長の茅 誠司氏、東京天文台長の萩原雄祐先生らが中心になり、東京プラネタリウム設立促進懇話会

が作られました。東急会長であった五島慶太氏の賛同をえて、渋谷東急文化会館最上階にカール・ツァイス製のプラネタリウムが設置され、日本光学製のシーロスタットほかの機器やさまざまな天文資料が製作展示され、1957年4月1日に開館しました。村山先生は直接の責任者として、建築からプラネタリウム本体の設置、展示模型等の製作にかかわられました。五島氏からは「科博をやめて、この館の館長として来てほしい」と言われたそうです。開館後も学芸委員会の委員として五島プラネタリウムを指導されました。

引き続きは、人工衛星の観測です。1957年10月4日旧ソ連はスプートニクを打ち上げ、世界で初めての人工衛星が誕生しました。翌年に予定されていたアメリカのヴァンガード計画のため、人工衛星を地上で追跡してその軌道を確定する観測が求められていました。村山先生は新聞社などと協力して、アマチュア天文家主体の観測班を組織していましたが、突然のスプートニク打ち上げに対応して、人工衛星について解説され、実際の観測もされました。

1969(昭和44)年7月20日のアポロ11号人類月面初着陸に当たっては、TV生中継の解説を行われ、全国のお茶の間にわかりやすく親しみやすい解説を届けられました。

1986年ハレーすい星の回帰に当たっては、小尾信彌先生、餌取章男氏らと日本ハレー協会を立ち上げ、ハレーすい星の解説や展示会・観望会を行うとともに、オーストラリアへの観測ツアーを主催し、一般の多くの人たちにハレーすい星を見せることができました。

観測ツアーとしては、1958(昭和33)年4月19日八丈島金環日食に多くのアマチュア天文家を率いて出かけられたのが皮切りですが、1963年7月20日ラウス日食にはNHKの鈴木健二アナ（後に「クイズ面白ゼミナール」などの人気司会者となる）と一緒に実況TV中継をされています。

在職中は、1970年3月7日のメキシコ・フロリ

ダ皆既食、飛んで1983年6月11日インドネシア・パプアニューギニア皆既食、1988年3月18日小笠原沖皆既食と数えるほどしか外に出られませんでした。ご退官後はほぼ毎回の日食にリーダーとして多くの天文ファンを率いて出かけられました。

アマチュア活動と村山スクール

「僕は天文アマチュアだよ」の言葉どおり、多くのアマチュア天文団体と連携がありました。後に会長になられた東亜天文学会では火星課長なども勤められ、神田 茂先生が創始された日本天文研究会では例会の司会者や会報の編集など重要な立場でした。アマチュア天文研究発表大会や日本天文資料センターでも重要な役職に就かれ、前述した日食情報センター代表ともなられました。土曜・日曜の村山研究室（後には研究部長室ですが）は、全国各地から上京されてきた天文アマチュアたちや天体観望会でボランティアとしてお手伝いする若い人たち、日食観測ツアーなどで知り合った人たちが訪れ、村山先生とお話して楽しいひとときを過ごしました。

観望会のボランティアは戦後から、現在に至るまで人は変わっても続いています。これらの人たちはいわば村山スクールの生徒さんたちでもあります。筆者もまた「村山スクール」の一員でした。1968年大学入学とともに上京した筆者は、村山研究室を訪ねました。「あ、あなたが西城くんですか」とお返事されたとき、とてもうれしかったことを覚えています。天文少年だった筆者は、火星や木星のスケッチの一部を村山先生に送っていたのです。

村山スクールには著名な方もいらっしゃいます。電波天文学の森本雅樹先生もその一員だったといえるでしょう。中学時代の森本先生はあまりにいたずらするので、怒った小山ヒサ子先生がほうきをかざして、机の下を逃げる森本先生を追いかけ回した、というお話を聞きました。「森本く

んは高校生になったら、もうラジオのほうにいったらいいよ」とのこと。また、天体写真家の藤井 旭氏、彗星などの軌道計算で著名な中野主一さんも村山スクールの卒業生です。

たまたま訪れる人の少ない土日は、村山研究室が光学工場になるときでした。反射鏡の研磨や、後には光学レンズの研磨場になったのです。磨き上げられた15 cmアクロマート鏡は村山天文台の主力機として火星観測に活躍します。筆者ものぞかせてもらったその星像は、とてもすばらしいものでした。「西城くんは、あんなやりかたでこんなレンズができたのか、と不思議そうな顔をしてたね」と村山先生。研磨の間、筆者もお湯の用意や周りの清掃など、多少のお手伝いをしたのでした。

テレビやマスコミ

村山先生を語るときなんとしても外せないのがテレビ、ラジオでの出演でしょう。先にいくつかをご紹介しますが、その出演数は千回以上にわたっています。1956年の火星大接近では、初めてTVで火星像を撮影するなど、TV草創期に様々な天体撮影の試みも行われました。その頃知り合った当時は若手のTVスタッフが後に各局で出世したりもしています。また各地での天文講演の回数もやはり千回以上になるでしょう。「僕はどんな講演でも、たとえ講演料がなくても時間が許せば引き受けますよ」とおっしゃっていましたが、科博・天文学普及講演会や五島プラネタリウムの講演会での講師捜しにご苦労があったことがわかります。

ご著書も数多く出版され、共著・訳書も含めると数十冊になります。科博奉職直後の20代前半から、特に子ども向けの書籍などが出版されています。「僕も生意気だったねえ」との述懐です。

雑誌についてもその発刊時にさまざまなアドバイスをされたり、委員として携わることもありました。

「天文と気象」誌（後「月刊天文」現在は休刊）

の編集員を一時期、また「星の手帖」誌（休刊）の編集委員をなされたほか、「天文ガイド」誌の発刊、「スカイウォッチャー」誌（現「星ナビ」）の発刊に際して、ご尽力されました。また、各誌に多数の記事を寄稿されています。もちろん、新聞各紙への寄稿や取材記事は多すぎて数え上げることもできません。

偉大な「科学コミュニケーター」

村山先生がなされたさまざまなことを書き綴ってきましたが、これらのことを考え合わせると、

一般公衆に親しまれ、人気のある現在の「天文学」の幾分かは村山先生が作り上げられた、とも思えます。村山先生は天文分野における、今話題の「科学コミュニケーター」の創始者であり、かつ「偉大な」と形容するに値する方だったと思われるではありません。先生が逝去された8月13日は「伝統的七夕」の日、ペルセウス座流星群の極大にあたり、翌14日は久しぶりの肉眼新星が出現しました。天文が大好きだった先生を、天界も歓迎したことと思います。

村山先生の思い出 山岡 均（九州大学大学院理学研究院／国際宇宙天気科学・教育センター）

8月にお亡くなりになった村山定男先生は、半世紀以上にわたって、天文教育・普及の旗手であり続けた。そのご活躍については西城さんが詳しくお書きになっておられるので、私は心安く、個人的な思い出を書き連ねさせていただこうと思う。

村山先生の葬儀は、先生が檀家総代を務めていた、愛宕の青松寺で執り行われた。記録的猛暑が続く折り、日本全国から200人以上の方々が、先生とのお別れに参集した。私もその一人となり、斎場で開式を待つ間が、先生とのかかわりを思い返す時間となった。

スプートニクショックはおろか、アポロ月着陸もウェスト彗星も天文ごごろが付く前で、四国の片田舎でハレー彗星前夜までを過ごした私と、科博を中心に活動されていた村山先生との接点は、天文界最大のベストセラー「天文学への招待」をはじめとする著作がメインであった。そんな私が大学進学で上京した後、村山先生のお役に立てた最初は、1989年、先生の科博退官記念パーティの会場探しだった。

大学院生だった私は、右も左もわからないま



写真1 米寿を祝う会でスピーチ。やはり饒舌だった。

ま、新宿の住友三角ビルで貸しホールのパンフレットを受け取り、すぐすと帰った記憶がある。役に立ってないような気もするが、パーティはちゃんと当所で開催されたので、意義はあったものと考えよう。パーティの席上で紋付袴に身を包み、小謡一番を唸った私の姿が、天文雑誌のグラビアに刻まれていることだし。

村山先生とご一緒する機会は、私が九州に就職した後も多かった。愛読させていただいた「天文学への招待」の改訂ヴィジュアル版の刊行に、微力ながら貢献できたことは、たいへん光栄なこと



写真2 地下の二次会会場にて。小尾信彌さん（左）とは小学校時代の同級生。
（写真1、写真2 写真提供：川口雅也）

だった。また、日本天文学会100周年記念事業として編纂された「日本の天文学の百年」で、村山先生の活躍をご本人から聞き書きできたこともありがたい限りである。しかしそれにも増して、叙勲のお祝い、出版記念、星仲間の小惑星への命名などなど、折りに触れて開かれるパーティで先生とお会いし、大いに語らうことは、何よりの楽しみであった。脳梗塞で車椅子生活を余儀なくされてからも、先生の饒舌は以前のまま、いや、さらに磨きがかかったことが懐かしい。

そのうちに、私はこのようなパーティを運営する側になっていった。もちろん一人でできることではなく、何人かの共同運営である。私のパティを務めてくれたTさんが、私のことを名前にちな

んで「北町奉行」と呼ぶようになった。とするとTさんの役回りは「南町奉行」である。さらに会計を担当したKさんは「勘定奉行」、お偉いさんの対応を引き受けたAさんは「寺社奉行」。宴会4奉行の誕生である。

先生の葬儀に際し、奉行衆で供花することになった。ところが名札が問題だ。まさか葬送に「宴会」「奉行」と書くわけにはいくまい。苦慮してひねり出したのが「星の会合 委員一同」である。参列者のほとんどが、誰のことかわからなかったと思うので、ここに書きとめておく次第である。

読経に焼香、最後のお別れが終わり、本堂の正面から出棺となった。10人ほどの屈強が棺を捧げて階段を降ろすのを見ていて、つい3年前のパーティのことを思い出した。あまり考えずに、二次会を地下の店に設定していたら、村山先生が参加すると言い張るのである。奉行衆を含め、若手が先生を車椅子ごと担ぎ降ろしたさまが、出棺と二重写しになった。そう、先生はパーティの続きを期待されているに違いない。

棺を乗せた車を見送りながら、私は心の中でつぶやいていた。先生、しばらくしたら土産話をたくさん持って行きますから、パーティの続きをお楽しみに。